



はばたきだより

第6号

2021.3

理事長挨拶

愛育学園はばたきが

今できること

～社会変化の渦中で～

大分子ども心理療育センター「愛育学園はばたき」を二〇二五(平成二十七年)四月一日に開設して六年が経過しようとしています。最大の課題は、職員の定着率です。それは取りも直さず「賈の河原」の例えのごとく、「はばたき」が果たすべき役割を一年ごとに再認識しなくてはならないことです。子ども達のために我々が為さねばならないことは無数にあります。できることは限られています。しかし、着実に一つ一つ成果を積み上げて行きたいと努力を重ねています。ヒトはそれぞれに「思い」があり「目標」があります。「はばたき」にも理念があり、掲示しています。この理念に同意し、理想に燃えて就職した職員が、やむを得ず去るということは、おそろしく理想と乖離した現実があったのであろうと推測します。何があるかと辞めずに頑張るためには、何をどのようになれば良いのでしょうか。経営者としては、その時々の問題を真摯に解決する努力を続けることを宣言するしかありません。

ん。どんなことでも改善するべきことは改善します。ただし、どのようなことでも直ちに切り掛かっても直ぐに成果が出るものではありません。全職員一丸となって地道に取り組んでいきたいのです。

コロナ禍のこの一年、かつて経験したことがないことが起こりました。広く社会に目を向けると、子ども達のモデルとなるべき大人たちがその責を果たしているでしょうか、残念ながら醜いところは曝け出したようで、自信をもって子ども達を導いたとは言えません。一方「はばたき」ではどうであったでしょうか。「こころ」に何らかの問題を抱えている子ども達、安心して生活できる環境の提供は、職員との信頼関係ひいてはヒトに対する信頼感の醸成は、入所児童各自に自尊心の回復と高揚は、発達と成長の保障は、時がただけにより一層配慮した処遇ができたでしょうか。振り返って自身自身に問い直してください。「ちゃんとできた」、「してきた」と言える人はいないでしょうか、真面目で謙虚であれば反省ばかりで落ち込んでしまいませんか。このような時だからこそ冷静に内省してみてください。何もできていない、自分はダメだと思ふ必要は全くありません。成果の

短期的な評価は困難です。正しく評価することも困難です。これらの課題を我々がしっかりと見据え、それぞれが持つ力とやり方で、子ども達の「状態」を常に改善し向上させるよう努力していますと胸を張って言えることが最も重要であり、今、私たちに求められていることであると思っています。良かれと思うことは何でもやってみましょう。良い結果が出ることも、思ってもみなかった結果であり愕然とすることもあるでしょう。要はその結果が「良いか、悪いか」ではなく「思いやり」の下で「誠意」と「信念」に基づき「こころ」のためにできることを「情熱」をもって実行することです。ゆっぴりですよ。少すすつでよいのです。私が観ている職員の皆さん方は、いつもよくやっていると確信しています。

この「はばたきだより」が多くの方々の目に触れることを期待して、身内層ではなく、共に働く医師の目と経営者の目で、私を含め全職員がこの社会情勢の中で「はばたき」において「何をなすべきか」を述べました。もう一度、最後に職員の皆様に、自信をもって、長い目で、目標は大きく、一歩一歩前進しましょうと呼びかけます。

理事長 藤本 保



施設長就任にあたって

愛育学園はばたき施設長 高塚 秀夫

昨 年四月に愛育学園はばたきの施設長に就任しました高塚です。よろしくお願ひします。

前職は県職員の行政職として四十年勤務し、そのうち後半は主に福祉保健部関係の所属が多く児童自立支援施設(一豊学園)、障害福祉課、精神保健福祉センター(こころ)からの相談支援センター、保健所等での勤務経験もあり退職後は福祉関係の現場、とりわけ社会的養護の現場で働きたいと考えていました。

日常でもマスク、ソーシャルディスタンス等感染対策を意識した生活を余儀なくされました。新型コロナウイルスな対応に追われる中、施設長としての職責が果たせるか一抹の不安はありましたが、山本浩二前施設長から引き継いだバトンを手に、日々子ども達の笑顔と職員との奮闘に支えられ何とかここまでたどり着いたと感じています。

命に支援にあたっています。その職員の奮闘ぶりに頼もしさを感じ、また躓きながら成長していく子ども達の変化に手応えや感動を覚える場面も少なくありません。

私は、はばたきという組織で仕事をするにあたっては、全職員が自己研鑽を忘れずに互いに支え合って子どもへの支援にあたること、信念、信頼、協働を意識することが大変重要だと考えています。

はばたきの三つの基本理念

① 児童の最善の利益を最優先した支援

② 愛情に満ちた二貫性のある支援

③ 信頼と絆の協働子育て

命に支援にあたっています。その職員の奮闘ぶりに頼もしさを感じ、また躓きながら成長していく子ども達の変化に手応えや感動を覚える場面も少なくありません。

私は、はばたきという組織で仕事をするにあたっては、全職員が自己研鑽を忘れずに互いに支え合って子どもへの支援にあたること、信念、信頼、協働を意識することが大変重要だと考えています。

PS

温泉、サウナ、映画、読書、旅行等が趣味です。

休日は出身地の佐伯市蒲江で畑の草刈りやみかん栽培、たまに筋トレ等で汗を流しています。

今後ともよろしくお願ひします。



新人職員紹介



「子どもとの関わりで大切にしていること」

伊藤 将

自分が愛育学園はばたきで学んだことは、服薬の大切さと児童との関わり方です。

服薬については、その子に必要な薬を用意してもらっているのですが、服薬忘れがいかにか重大なミスであるかを改めて学びました。今では、自分ひとりだけではなく他の職員との連携で二度、三度のチェックをして児童に薬を飲ませるように心がけています。

児童との関わり方については、入職当初、試し行動をしてくる児童にどのような指導をすればよいのかまだ分からなかった自分は、その児童に対して曖昧な支援しかできませんでした。支援方法で悩んでいる自分に

先輩方が的確な助言をくれました。その後も先輩方に話を聞くと、入職当初に自分と同じ悩みを持っていたことを教えてくれました。今では児童のことをよく観察して適切な支援を考えながら仕事をしています。

現在の状況に満足せず、より良い支援を心がけるように頑張ります。

趣味 **ダーツ**

特技 **小1から高3まで剣道をしていました**

好きな食べ物 **酸っぱい食べ物**

好きな音楽 **広く浅く色々な音楽を聴きます**

スポーツの年!

7月 卓球大会



2020年度のはばたき男子ユニットの大きなテーマは、「体力づくり」「スポーツ」でした。夏の筋トレでは男の子みんなが気持ちのいい汗を流し、筋肉と体力をつけました。そして練習を重ね卓球大会も実施しました。最初はコートに球を入れることができなかつた子どもも、サーブや返球が打てるようになりました。スポーツや体力づくりをみんな楽しんで体験から、体、心、技術などたくさんの成長が得られた「汗の夏」となりました。

9月 バドミントン大会



夏に引き続き、「スポーツの秋」はバドミントン大会を実施しました。練習から男の子みんな頑張っており、職員のコーチングから必死に学ぼうとする姿勢がありました。大会当日では、緊張して本領発揮できなかつた子どももいたり、練習量が他より少なかつた子どもが勝ち上がったりと、拍手歓声の沸く波乱万丈の催しとなりました。練習の努力が結果につながつた子どももたくさんいて、みんな気持ちのいい笑顔を見せてくれました。



安心・安全な学校をめざして

大分市立数戸小学校・大分市立植田東中学校

はばたき分校 教頭 渡辺 ゆかり



はばたき分校へ赴任です」
——昨年三月、前任校の校長から告げられたあの日、「はばたき分校」情緒治療」がインプットされていた私は、正直、驚きました。「支援学級を担任したことのない私がなぜ？」という不安な思いと、「よし、やるぞー！」という前向きな思い。そして、気持ちを新たに…。任せられたからには、その場所ですることができることを精いっぱいやる。そう、そう決意し、はばたき分校での勤務がスタートしました。



はばたき分校は、数戸小学校と植田東中学校を本校とし、県内各地からの児童生徒を受け入れていきます。総合環境療法という支援で、生活拠点や医療・心理面のサポートは「愛育学園はばたき」で、そして学習のサポートを「はばたき分校」が行っています。

分校に通う児童生徒には克服しなければならぬ課題があります。それぞれが様々な課題を抱え、日々過(こ)しています。分校では、児童生徒下校後、小中全職員で児童生徒の情報を共有する時間をもっています。中学部の教師が小学生の子どもを知る、小学部の教師が中学生の子どもを知る、これがはばたき分校の良さの一つでもあります。

はばたき分校に転入した児童生徒は、学校見学後、数日間の



「スタートカリキュラム」が開始し、二日目の「時間目は私が担当します。」なぜはばたきに来たのか「自分の課題は何か」そこを明確にします。当初は、どこまで踏み込んでよいのかわからず、子どものデリケートな部分に踏みこむことに躊躇する自分がいました。日々過ぎていく中で、はばたきで生活する以上それがどんなに大切なことなのかが見えてきます。「あなたの課題はイライラしてすべに感情を出してしまうことです」「あなたの課題は、苦手なところから逃げてしまうところですよ」「イライラしても、やりたくなくても、頑張りますよ！」そう毎日言い続けていきます。初めはイライラして感情をむき

出しにしていた子が、ぐっぐぐとえ、課題に向き合うことができた時、何度声をかけても自分から動こうとしなかった子が「クールダウンしたい」と発することができた時、友だちとの関係性が築けず素直になれなかった子が、初めて友だちを許すことができた時、自分を表現することが難しかった子が初めて自分を表現できた時…。はばたき分校では、たくさんの感動に出会い、たくさんの感動を見つけることができます。

安心安全な学校をめざして…これからも、児童生徒が自分らしく羽ばたいていけるように、学園の先生方と力を合わせて進んでいきます。

はばたきに来て一番思うことは、はばたきに来たおかげで、自分自身が変われることがあったということです。



のつはる自然体験学習



9月、天候にも恵まれ、のつはる自然体験学習を実施しました。これまでコロナ禍の影響もあり、室内での学習が主だった児童生徒にとって、自然豊かなこの環境には心も解放され、見るもの触れるものすべてに目を輝かせる姿がありました。

また、日頃は少食な児童もこの日ばかりはお代わりする姿も見られ、非日常がもたらす変化に驚かされました。児童生徒も教職員も、久しぶりの校外学習で有意義な時間を過ごすことができました。

ふれあい運動会



10月、本校の体育館で「ふれあい運動会」を実施しました。開会式では、児童生徒一人ひとりが自分の目あてをみんなの前で発表します。事前に発表練習をしていたものの、やはり緊張します。でも、この緊張を乗り越えてほしいと教職員もそばで見守ります。緊張の壁を乗り越えられた時、そこには笑顔が広がり、心の中に自信が満たされ、次への意欲につながります。

また、きちんと礼をし、丁寧な言葉でボールを受け取るなど日頃のSSTを意識した種目もありました。すべての場を成長につなげようとする教職員の思いがありました。

学習の様子



教室での学習の様子です。担任の問いに対して、いくつもの解答が出てきます。教師の指導力も試されますが、担任は多様な考えの理由を一つ一つ丁寧に聞き取りながら、展開していきます。

意欲の浮き沈みは児童によって違います。沈んでいる時は、他児の発言や音さえ、敏感に気になります。そんな時は、個別対応をします。

個別対応のやり方は様々ですが、写真では、パーティションを組み、対応をしています。それでも対応が難しい時は、教室外で児童の状況・状態をじっくり聞きとり、対応をします。

学園との連携



学園の施設長を始め先生方が、学校行事に参加して下さることはオープンスクールなど年に数回あります。

写真は、その中の一つ、中学生の「模擬職場体験学習」の様子です。今年度はコロナ禍の影響もあって外の職場へ実際に何うということではできませんでした。そこで行ったのが校内カフェです。カフェ店員として接客を体験しました。学園の先生方もたくさん来て下さって、生徒に温かい言葉をかけてくださいました。

学園の先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。これからも連携して、共に力を合わせて進んでいけたらと思います

令和2年度 はばたきの年間行事



BBQ

みんなで美味しい
お肉を食べました!



梨狩り

立派な梨がたくさん
採れました!



ハロウィン

おもしろい格好の
子どもがいっぱい!



クリスマス会



子どもたちの催し物が
とても盛り上がりました。



児童指導員として感じたこと

生活指導 佐藤 朱

児童指導員として働き始めて今年で四年目となりますが、入職してからの頃の自分と比べると、少しずつ児童支援の中での楽しみを実感できることが増えてきました。以前は純粹に子どもと触れ合うことが楽しみでしたが、様々な課題を抱える子どもたちの生活は、やはり楽しい一面ばかりではなく、子どもにも課題があるように職員自身も困難を感じることが多々あります。しか

し、長い時間をかけて一緒に悩み、ぶつかりながらも指導を続けた先に子どもも成長を感じられると、とても嬉しく感じます。それは朝の挨拶が返ってくるようになった等の小さなことから主訴の克服まで様々なパターンがありますが、自分たちの支援がちゃんと生きていたのだと思える瞬間があるとき、くじけそうにな時にも頑張れる気がします。

心理職員として感じたこと

心理療法担当職員 緒方 康文

はばたきの心理職員として二年目になりました。入所児童のセラピーなど心理治療だけでなく、生活場面に介入し、子どもとの関係性構築も生活支援も生活指導職員と同様に行います。生活場面では大人しい子どもでもセラピーでは激しく体を動かす遊びを好んだり、自分の気持ちを言葉にすることが苦手な子どもゆづり話をすることができたりと子どもの様々な様子を知ることが出来ます。

様々な様子を見せてくれる子どもに合った関わりや環境調整を行うことで、信頼関係を構築し、子どもは安心感を得ながら生活することができ、子ども自身の成長と心の安定に繋がるのだと感じます。
今後子どもとの時間を大切にしながら、私の専門性を高め、それぞれの子どもに合った支援や関わりができるように日々精進したいと思っています。

看護師として思うこと

看護師 音木 教子

今年で看護師になり二十八年となりました。先日、看護学校卒業時に書いた卒業論文「私の看護観」について思い出することがあります。私の看護観は「患者さんと共に患者さんの持っている力を十分発揮できるように手伝いをさせて頂く」ことです。現場経験を二十二年間、また児童福祉に関わり七年が経ちました。福祉の世界は医療現場と違い、数値で治療効果を判断したり、治療効果が直ぐに目に見えたりするわけではありません。粘り強くコミュニケーションを図りながら、心と身体の治療を進めなければなりません。

別れを何度も経験しました。職員の気持ちは溢れるほど子ども達の為に注がれているのですが、長期的な治療過程が故に心が折れてしまつたことは何なき開園からの六年間、私に出来ることは何なき、常に自己責任で答えてきました。一人専門職の為、余裕が無い時もありますが、原点に立ち戻り看護観を改めて心に留め、誓いも新たに前進していくことと思います。私の今の看護観、それは「児童生活職員・心理職と治療に携わる医師と共に、皆を支えながら最高の治療効果が発揮できるようにお手伝いをさせて頂く。」。これからも微力ではありますが看護師としての使命を全うしていきたいと思つています。

はばたきスタッフの声

調理師として大切にしていること

調理師 伏野 久美

夏休みに「はばたきバイキング」と称して、二つのイベントをしました。
各ユニットで子どもたちと調理した焼きそばやカレー、からあげ、デザート類をみんなを持ちより全児童、全職員でわいわいしながら食べました。普段あまり笑顔を見せない児童がとてもし手に笑顔で焼きそばを作っている姿や、「これ僕が作ったよ」と嬉しそうに話している児童の姿に驚きと成長を感じ、私自身もとても元気をもらいました。

様々な背景を抱えている子どもたちにとって、楽しい食事、笑顔の食事は身体の成長だけでなく心の栄養にもつながると思います。家庭で親が我が子を想いごはんを作るように、私たちが毎日の食事にたくさん愛情と心を込めて、これからの子どもたちとの関わりを大切にしながら食事作りになさってくださいたいと思います。

これまででの私とこれから

事務 河野 勇

熊本地震、その傷が癒えないうちに九州地方を襲った豪雨により多くの尊い人命と財産が失われました。更に新型コロナウイルスによる感染爆発は世界中を震撼させています。私は、二十七年間勤務した前職を定年退職し、その後、の穏やかな生活を想像していましたが、縁をいただきこの愛育学園はばたきにお世話になることが決まり、早いもので五年目を迎えることができました。永年医療機関で過ごした者が児童福祉施設で働くことになるとは夢にも思っていませんでした。

こに来た児童の数はこれまで六十七人に上ります。児童と直接触れ合う機会は滅多にありませんが、子どもの方が先に私の名前を呼んでくれたことや、ここに来て三ヶ月が過ぎたある日に入所女児が「先生はばたきに慣れた」と声をかけてくれたことなどは今でも鮮明に記憶しています。
通えなかった学校にみんなと登校して勉強することの意味を知り、とてつもなく速いボールを投げる、触れたことがないピアノやギターを見よう見まねでも一生懸命に奏でる姿には改めてその子ども達が持つポテンシャルの高さを感じました。
すばらしい施設設備の中でこれまで以上に安心して過ごすことができる環境を提供し、これから入所してくる児童だけでなく、社会に巣立っていく子どもたちの活躍を心から楽しみに業務に取り組んで参ります。

管理宿直として感じたこと

管理宿直 大久保 天音

私は大学で福祉を学びながら、はばたきで管理宿直として働かせていただいています。子どもたちと関わっていく中で、大学の座学や短期間の現場実習ではわからない自分自身の力不足に気付かされ悩むこともありましたが、それと同時に、子どもたちの優しさや頑張りに触れ感動することもあり、児童福祉の現場のやりがいに気付きました。日々の生

活場面において、先生方の子どもたちへの指導の仕方や関わりを見て学ぶことが、子どもたちとの関わりの中で自分自身が気付くことが非常に多く、大学の学びと並行して実際に現場で働くことの重要さを感じます。至らない一杯ですが、これからも自分のできる精一杯で子どもたちと関わり、共に成長していきたいと思つています。



寄付・ボランティアへのご協力 ありがとうございました!!



本年度、寄付金・寄贈品・ボランティア等にご協力下さいました皆様をご紹介致します。【順不同・敬称略】

音楽ボランティア

- 生田 純子 ● 田口 千里 ● 甲斐 優希 ● 生田 大明 ● 中村 慎吾 ● 中村 圭志 ● 古賀 華季

その他ボランティア

- 吉田 俊恵 ● 佐古 健二(美容室gic)

寄付

- 厚生労働省 ● 大分県 ● 大分県社会福祉協議会 ● 大分県農業共済組合 ● 大分銀行労働組合
- 日本労働組合総連合会・大分県連合会 ● 大分1985ロータリークラブ ● 大分臨海ロータリークラブ ● むぎの会(NPO法人)
- 九州納豆組合 ● NHK歳末助け合い募金 ● 日本コカコーラ ● インホープ株式会社
- セ・デュ・ナナン(宇佐市) ● ブルデンシャル生命保険株式会社 ● はばたき分校
- 岸本 智子 ● 生田 純子 ● 松井 巳美(由布市狭間小) ● 荒深 孝子(別府市石垣小) ● 杵築市民(匿名)

編集後記 ～「命」の尊さ～

2020年は新型コロナウイルス感染拡大による未曾有の事態に脅かされた一年になりました。感染報道がされない日はなく、「人命」の尊さを痛感する毎日です。脅威の感染症は私たちの生活に様々な「革命」を巻き起こし、感染拡大予防を意識・徹底した新生活様式の実践が余儀なくされ、マスク着用以上に息苦しい世の中へと変貌しました。最も悲しいのは、生活制限とマスクによって、人々の心と顔から笑みが見えなくなったことです。

人々の尊い命のために、最もリスクの高い第一線で「懸命」に働く人たちがいます。常に大きな危険に晒されている彼らにも当然尊い命が宿っており、特に彼らの抱く不安は想像を絶するほどでしょう。他にも、世のため人のために尽力する人が数え切れないほどいます。全ての努力と思いやりに感謝が絶えません。一方で、一刻も早く世の中から悲しい不幸の連続が絶えてほしいと祈るばかりです。

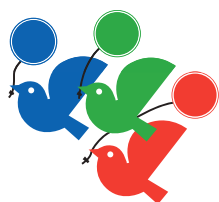
総じて、2020年は多くの「命」の尊さを実感する年となりました。

さて、今春も『はばたきだより』を発行することができました。原稿執筆依頼を快くお受けくださった理事長先生をはじめとする関係者の皆様、校正作業やレイアウトの打ち合わせから発行まで綿密かつ多大なご協力をいただいた株式会社ひまわり様、郵送や設置など最後まで関わってくださった皆様、そして拙稿な本号をお読みくださっている皆様に最大の感謝を心より申し上げます。

日頃多くの方に愛育学園はばたきをご支援いただいております。一方でまだまだ至らぬことが多い私共ではありますが、今後も求められる児童心理治療施設としての「使命」を果たしていけるよう、職員一同、惜しみなく努めて参る所存です。

これからもよろしくお願い致します。

はばたき広報委員 川村 涼太郎



社会福祉法人藤本愛育会

大分こども心理療育センター **愛育学園はばたき**

〒870-0948 大分県大分市芳河原台11番29号

TEL (097)578-7755 FAX (097)578-7756

<http://www.oita-kodomo.net/habataki/>